

高次脳機能障害とは

高次脳機能障害とは、医学的には、病気やケガによって脳に損傷を受けた場合、言語・思考・記憶・行為・学習・注意などの認知機能全般に障害が生じることを言いますが、行政的には、以下の主な症状のような障害を高次脳機能障害と呼びます。

高次脳機能障害の主な症状

記憶障害（きおくしょうがい）

見たり聞いたりしたことを覚えられなくなったり、覚えていたことを思い出せなくなったりします。

〈例 示〉

- ・自分がしたことや物を置いた場所を忘れてしまう。
- ・約束を守れなかったり、忘れてしまったりする。
- ・何度も同じ話をする。

〈対 応〉

- ・メモや手帳、カレンダー、ボイスレコーダー、日記、タイマーなどを活用する。
- ・作業時には手順がわかるもの（手順書等）を活用する。
- ・覚えたいことは繰り返し復習する。

〈接し方のポイント〉

- ・情報は短くして伝える。
- ・本人にとって覚えやすい方法を用いる。（見る・聞く・実際にやる等）



注意障害（ちゅういしょうがい）

長時間ひとつのことに集中できなくなったり、気が散りやすくなったりします。また、注意を向ける対象の切り替えがうまくいかないことがあります。

〈例 示〉

- ・何かをする時にミスが多い。
- ・複数のことを同時にすることが難しい。

〈対 応〉

- ・何かをする時には、注意をそらすものや大勢の人がいる場所を避け、できるだけ静かな環境をつくる。
- ・作業はひとつずつ行う。

〈接し方のポイント〉

- ・話をする時は、視線を本人に向け、本人もこちらの方を向いていることを確認し、言葉だけでなくジェスチャーなどを用いて注意を引く。
- ・指示を伝える時は、一度に伝えずにひとつひとつ簡潔に伝える。



遂行機能障害（すいこうきのうしょうがい）

計画を立てて行動することが難しく、行き当たりばったりの行動をしてしまいます。

〈例 示〉

- ・物事の優先順位をつけることが難しい。
- ・突然の出来事に臨機応変に対応することが難しい。
- ・間違いを次に活かすことが難しい。

〈対 応〉

- ・時間に余裕を持って計画を立てたり、行動したりする。
- ・作業の手順がわかる手順書等を活用する。

〈接し方のポイント〉

- ・情報を伝える時は、あいまいな指示を避け、具体的にわかりやすく伝える。（いつ・どこで・誰が・何を・どのように）
- ・作業をパターン化させる。



社会的行動障害（しゃかいてきこうどうしょうがい）

ささいなことで怒ったり泣いたりするなど、自分の感情や行動をコントロールすることが難しくなります。

〈例 示〉

- ・自分からは何もしようとしなかったり、気持ちが落ち込みがちになったりする。
- ・食べ物を際限なく食べたり、お金を使いすぎたりする。
- ・人の気持ちをうまく察することができない。
- ・ひとつのことにこだわりすぎる。

〈対 応〉

- ・イライラの原因を探し、原因を作らない工夫をする。
- ・リラックスできる方法を見つける。

〈接し方のポイント〉

- ・感情のコントロールが難しいことを周囲が理解する。
- ・不適切な行動は指摘し、叱ったりせず、客観的にその行動・言動がどう思われるかを伝える。
- ・興奮している時は、場所や話題を変える。



★メモ★

Blank space for notes.

高次脳機能障害のその他の症状

易疲労 (いひろう)

身体的にも精神的にも疲れやすくなります。症状としては常に眠気があったり、長時間姿勢を保って座っていることができなかつたりします。疲れるとミスをしたり、イライラしたりしやすくなります。

〈対応〉

疲れる前にこまめに休憩をとる習慣をつけて、深呼吸やストレッチなどをするようにしましょう。



半側空間無視

自分の前の空間の半分に注意が向けにくく、対象を見落とします。右の脳に損傷がある場合には左半分に注意が向けにくくなり、左側の物にぶつかったり、左側から声を掛けられても気付かなかつたりします。

〈対応〉

本人は半分の空間を認識していないことに気づいていないため、半分の空間は注意が向きにくいことを繰り返し伝え、自覚するように促したり、注意を向けやすい環境を整えたりしましょう。

失語症

言葉による意思の疎通が困難になることです。症状としては言葉の出にくさ、話の理解の困難さがあったり、文字が書けなくなつたり、計算ができなくなつたりします。

〈対応〉

会話をする際には、はっきりと、ゆっくり短い言葉で話すなど、本人が理解しやすい話しかけ方を心がけましょう。その他にも身振り手振りや物や絵を見せることも有効です。ただし、知的機能の問題ではないことに注意しましょう。

病識の欠如

自分の障害に気づかず、自分の状態について説明できなかつたり、直面している問題に現実感がなかつたりすることがあります。病識がないため、職場への復帰や車の運転など病前にはできていたけれども現状の自分ではできないことをしようとしてしまいます。

〈対応〉

本人が障害を認識するためには、実際にできないことの体験をしたり、同じような人の話を聞いたりすることが有効です。しかし、できないことばかりに目を向けるのではなく、本人にできることにも目を向けましょう。

失行症 手足に問題はないが、適切な動作がしにくくなる。

失認症 視覚、聴覚、触覚などを通して対象のものを認識できなくなる。

地誌的障害 知っている場所で道に迷う。場所がわからなくなる。

見当識障害 時間や季節がわからない。

高次脳機能障害の症状には上記のような様々なものがあります。